

B・グッタ著

工業化の経済学

Bhabatosh Datta, *The Economics of Industrialization, a Study of the Basic Problems of an Underdeveloped Economy.*

Calcutta, 1957. pp. X+332.

深沢 八郎

後進国の経済発展に関する論議は、従来欧米その他のいわゆる先進国の経済・社会学者によって展開され、その貢献も大きかったと思うが、後進国自体の内に住む人々の見解は比較的少なく、しかも欧米その他の学者のそれに対する部分的批判に止まる場合が多かったように思う。この一点から人は後進国の経済学界の後進性あるいは植民地性を推測することも可能であろう。

しかし後進国の内側にある人々は、それぞれ自国のデータを深い理解をもって分析を進めることによって、従来欧米その他の人々がかれらの歴史・経済理論と乏しい後進国認識の上に組み立ててきた経済発展あるいは経済成長の議論に対して、たんに

なる批判に止まらず積極的・実質的な貢献をなしうるしまたなすべきでもあらう。それは後進国の人々にとっては、学問的要請であると同時に自国の経済政策につながる緊急な実践的課題である。

こういう視角から後進国の人々によって書かれた経済発展論を見ることに筆者は若干の興味を感ずる。ここにとりあげるグッタ教授(カルカッタ大学)の著書もその一つである。

* 本書の意図は、過剰人口をかかえた農業国(＝後進国)において雇傭・所得の増大、資源利用の高度化(＝経済発展)をもたらす最も重要な方法として「工業化」の必要を基礎づけ、さらに進んで「工業化」の方向を規定する条件としての技術・資本調達の問題を論ずることにある。

人口過剰な後進農業国においてはたんに農業部門だけでなくその他の産業にも広汎に「偽装的失業」があるが、その原因は先進国のような景気循環によるよりはむしろ、主として生産組織の構造的硬直性と一部は季節的要因にあるとする。

この偽装的失業の消滅さらに労働以外の資源利用の高度化をもたらすことは雇傭・所得の増大を結果することになるが、これこそ後進国の経済発展における最も重要な問題である。したがって偽装的失業の主原因である硬直的な生産構造を変えるこ

とが、問題解決に最も必要なこととされる。

構造変化については、農業内部におけるそれ（新技術導入あるいは新投資による）には多くを期待しえないとして、著者の関心はむしろ「工業化」によって農業部門から非農業部門への労働力移動を促進し就業構造を変化することの有利性に向けられる。著者はまた工業化の必要性を経済発展の初期に見られがちな「爆発的人口増加」対策としても人口抑制政策を併行する場合にヨリ一層効果的である点に求めている。

ついで「工業化」の方向あるいは速度を規定する条件として、資源の現状ならびに将来性を考察する。その場合経済発展における最も重要な可変要因としての資本の供給、労働の質に関し、のみ問題を取りあげている。熟練労働力の不足とその養成、国内貯蓄とその動員可能性、外資の役割とその導入可能性、貿易・国際収支の諸問題など。

以上が本書の構成の骨子である。著者が大体ポスト・ケインジアン立場にあることはいうまでもない。内容についてとくに新しい見解は見あたらない。本書の特質——と言いうるとすれば——は、著者の立場から従来の諸見解を要領よくまとめた概説書たる点にあろう。豊富なデータ——東欧諸国、中近東、アジア諸国、とくにインドのそれ——を駆使した叙述は、国際的舞台上活躍した著者ならではの感がある（著者は一九五三—

五六年間国際通貨基金の職員であったし、それ以前にもロンドン、ジュネーブ、ストックホルムなどに遊学している）。

しかし反面、国際人としての弱味のうちかがわれる。例えば技術援助外資導入についての希望的楽観。インドにあったなら政府その他の新しい資料をもっと自由に利用してインド独自の問題に立ち入った分析が可能であつたらう。——著者の学問的立場の如何にかかわらず、後進国とくにインドの場合などには制度的要因の考察にまで立ち入らざるをえないと思うが本書ではほとんど除外されている。本書が後進国経済の一般論として特筆すべき新味もなく、著者の母国インドを知る上にも不満の多いものに終っている所以はこの点に求められないだらうか。